

僕は脚本家

田口成光（高14回）

2021年春よりBSNH^(*)で、4Kリマスター版により放映されている「ウルトラQ」及び「ウルトラセブン」は、今から半世紀前にTBSテレビで放映されていました。

リマスター版とは、当時劇場映画と同じ35ミリ幅のフィルムで撮影された原盤を、コンピューターで修復して再現したものです。これだけでも大変な事なのに民放で放映された作品をNHKでわざわざ放映すること自体稀有な事でもあります。

僕の名刺の肩書は「日本脚本家連盟所属」に並列で「日本放送作家組合所属」と表示されています。いわゆる脚本家という仕事ですが、近年あちこちで開かれるイベントに引っ張り出されることもしばしばです。イベントのタイトルは「ウルトラマンシリーズ」。

会場には全国からファンが駆けつけて来ます。ファン

の多くは40代から上の大人でしょうか。彼ら（まれには女性もいる）は恐ろしく熱心で、よく「ウルトラマンシリーズ」を研究し尽くしています。困ったことに僕の知らないことまで知っていて、トーク終了後の懇談会でのけ反るような質問をされることもしばしばです。



たぐち・しげみつ
昭和19年2月4日生まれ。
飯田浜井場小学校、飯田東中学校。昭和41年日本大学芸術学部映画学科卒業。同年内谷プロダクション入社。48年フリーに。趣味はカメラ、オーディオ、川崎トロンロン星人酒場と共に海釣り。愛犬の名はステラ。

高校時代は山岳部

僕は昭和37年春、飯田高校を卒業しました。飯田高校在学中は山岳部に所属していましたが、最大の出来事は何といっても36年の集中豪雨でしょう。

連日バケツをひっくり返したかのような雨が降り続々、学校帰りに野底川の橋が落ちそうになっているのを見た。不謹慎にも「明日から学校が休みになつたりして」と言っていたら、本当に翌日から1か月ばかり休みになつてしましました。

2番目に記憶に残っているのは、2年前の34年に、浜井場小学校の裏にあった内山花火工場が爆発したことです。授業中の教室のドアが吹っ飛んだのを記憶しています。同級生の岡島浩君の家は、爆発と野底川の氾濫の2回の災難で全壊してしまいました。

ところで部活のほうは、土曜休日のマル特制度で連休を利用して1泊山行を謳歌したりもしました。折しも当時は登山ブームの最中で、先輩たちがネパールヒマラヤのシャバチュメを初登頂し、講堂で凱旋報告会などもありました。その後、ヒマラヤ遠征に使用したテントなどを山岳部に寄贈されるというような事もありました。蛇足ですが、飯田市の公民館に若き日のスキーヤー三浦雄一郎と登山家の芳野満彦が講演に来て、大いに触発された僕は新聞部の発行する文集に「山靴の音」という短編小説を投稿した記憶があります。

さかのぼって思い起こすと、僕は小学生のころから将来作家になる予感のようなものがあつた気がします。東中学校時代にも学校新聞に詩作が載つたりもしました。

映像世界へ

昭和38年4月、日本大学芸術学部映画学科に入学しました。作家生活にひた向かうことになります。思えば高

校時代、学校帰りに毎週映画を見てきたことに背中を押されたのかもしれません。当時、飯田には「常盤」「銀星」「中劇」「日活」などの映画館がありました。

映画学科では「脚本演出コース」を選択しました。文字通り映画のための学校で、業界では「石を投げれば日本芸に当たる」と言われるくらい先輩が多くいたのです。授業ではみんなが8ミリ撮影機や編集機、映写機を持たされる実習が多くありました。当時はまだフィルムの時代でビデオカメラなどはテレビ局にしかありませんでした。8ミリのフィルムなど、今はもう売つていません。撮影したてのフィルムを東銀座の富士フィルムに持ち込むと一番早く現像できたものでした。

映画学科での一番の思い出は脚本のゼミでした。講師は当時売れっ子の脚本家柳沢類寿でした。生まれて初めて書いた脚本を褒めてくれた恩師であります。柳沢先生は松竹から日活を渡り歩いた方で、ゼミに今村昌平、川島雄三など映画史に登場する監督を特別講師で招いてくれて、身近に見るレジエンドに胸をときめかせたものです。

捨てる神あれば拾う神あり

昭和41年夏。僕は「円谷特技プロダクション」のドアを叩いていました。社長は言うまでもなく、「ゴジラ」をはじめ多くの特撮を手がけていた円谷英二その人です。人生は、人とのめぐり逢いで左右されるものだとつくづく思います。そこで、映画学科の研究室の准教授から、友人であつた円谷プロの企画室長の金城哲夫を紹介されたのでした。沖縄出身の彼こそが、ウルトラマンの生みの親であり脚本家でもありました。面接の時に初めて、間近で円谷英二に接しました。監督はニコニコ笑顔を絶やさない小柄な好々爺でした。いつたい何處に獣的な怪獣ゴジラを生み出すパワーがあるのか想像もつきませんでした。

その頃、円谷プロの状況は、前の年に放映された「ウルトラマン」の製作が間に合わなくて一時休止。新たに「ウルトラセブン」を始める準備中でした。

僕は、はじめは脚本家志望の面接でしたが、「特技プロダクション」という特殊性に鑑み現場を体験して欲しい、とまずは助監督からスタートすることになりました。

ウルトラマンの撮影現場は2つに分かれています。俳優たちが演技する実写班と怪獣たちが活躍する特撮班で

この時代の最大の楽しみは、皆が力を合わせて撮影した完成フィルムを、円谷英二立ち会いで見る試写でした。時に厳しい社長の一言で撮り直しなどが出ることもありましたが、このようにして「ウルトラセブン」の助監督時代は終了しました。

この時代の最大の楽しみは、皆が力を合わせて撮影した完成フィルムを、円谷英二立ち会いで見る試写でした。時に厳しい社長の一言で撮り直しなどが出ることもありましたが、このようにして「ウルトラセブン」の助監督時代は終了しました。

す。そこで僕は特撮班の助監督に配属されました。助監督の仕事というのは撮影現場がスムーズに進行するための何でも屋です。まずは脚本からシーンを洗い出してスケジュールを組み、翌日のセットや小道具や俳優の手配に始まり、当日の撮影順番の指示など。早飯、早糞を強いられるだけでなく、特撮現場では泥まみれ火まみれ（火災シーンや爆発）、冬の水中での格闘など知力体力を絞り出されもしました。当時の撮影ステージは冷房や暖房の設備もなく、火薬などを使うシーンではワンカット毎に入り口を開放して煙を排出するような状況でした。そう言えば、代役で怪獣のぬいぐるみの中に入つたこともありましたつけ。

昭和46年4月から「第一期ウルトラマン時代」と呼ばれるシリーズがスタートします。

このシリーズこそ僕が志していたシナリオ作家の始まりました。

ウルトラ作家修業

昭和46年4月から「第一期ウルトラマン時代」と呼ばれるシリーズがスタートします。

このシリーズこそ僕が志していたシナリオ作家の始まりました。



「帰ってきたウルトラマン」クラシックイン時。左から筆者、岸田森、榎原るみ、川口英樹、田時朗

りでした。「帰ってきたウルトラマン」が僕のデビュー作品となりました。処女作のタイトルは「怪獣时限爆弾」。監督は上諏訪出身の観正典という東宝の方でした。この処女作の誕生までにはかなりの時間が掛かりました。テレビ局（TBS）の担当プロデューサーが厳しい方で、過去に何人の作家が挫折したという伝説があるほどでした。

脚本の打ち合わせというのは、テレビ

局と製作会社（円谷プロ）のプロデューサーと監督が参加します。まず簡単なストーリー打ち合わせでOKが出ると執筆に入ります。200字詰めの原稿用紙に換算して60枚から70枚ほどに仕上がる。打ち合わせは全員が回し読みし、各自が気になる頁の角縁を折りました。作家は誰がどの角縁を折ったか盗み見しながら判定を待ちます。その後、折りたたんだ頁をどう直すかの検討をして、原稿が修正されると準備稿が印刷され、現場に配布されます。現場では準備稿を元になります。特撮の場合はミニチュアなどの出来映えで完成度が決まるといって良いでしょう。

ところで、ドラマの語源はギリシャ語のドラン、心の人生



ウルトラ後の人生

人生の前半はウルトラであります。そこには脚本はNHKでアニメ「ニ尔斯の不思議な旅」、テレビ朝日で「あばれはっちゃん」シリーズ」を6年間など、数百本の作品があります。

2018年にはあかね書房から、伝記『円谷英二』を出版し、母校浜井場小学校の図書館に寄贈致しました。光陰矢のごとし、あつという間の50年でしたが未だに「ウルトラマン」が放映されている不思議。巨大な怪獣に対抗して、世界で最初の変身巨大ヒーローを生み出した円谷英二の発想の豊かさ。偉大な先駆者に脱帽です。